

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



特集

自治活動が果たした成果

演奏を披露する二本松市建設技術学院跡地仮設住宅の住民

- **みんなで元気に暮らすために** ③
イオン南方店跡地応急仮設住宅・南方高齢者クラブ（宮城県登米市）
- **サークル活動は私たちの誇り！自慢の仮設住宅** ⑤
二本松市建設技術学院跡地仮設住宅（福島県二本松市）
- **畑仕事で交流育む住民たち** ⑦
清水仮設住宅、新田仮設住宅（宮城県女川町）

☆ **専門家に聞く地域づくりのヒント** ⑧
（北星学園大学社会福祉学部 教授 杉岡直人さん）

- **東北の元気** ⑨
マートル（宮城県仙台市）
- **まちの仕組み** ⑩
震災で自分の地域を見直した住民たちの力（宮城県美里町）
- **災害公営住宅について考えよう！** ⑫
災害公営住宅移行研修ってなに？
- **生活困窮者への支援を考える** ⑭
自立支援のカギは地域にあった！
（一般社団法人鉤路社会的企業創造協議会副代表・
宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザー 櫛部武俊さん）
- **宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ** ⑮
ひとりごと サポーターのあなたへ ⑧
（宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザー 浜上章さん）
- **場の力** ⑯
男の談話室（岩手県宮古市）



自治活動が果たした 成果

東日本大震災後、各地に建設された仮設住宅内では、
入居住民による多彩な活動が行われてきました。
お茶会、手芸、体操、畑仕事……
それらの活動は、住民たちの生活に潤いを与えています。

宮城県登米市に建つイオン南方店跡地応急仮設住宅は、
宮城県南三陸町出身の住民が暮らす仮設住宅です。
高齢の住民が閉じこもりがちになってしまう現状をなんとかしなければと、
住民たちが登米市高齢者クラブを結成しました。

福島県浪江町出身の住民が暮らす、二本松市建設技術学院跡地仮設住宅。
住民の「好き」や「得意」を活かしたサークル活動は、
仮設住宅内でだけ楽しむのではなく、
周辺の地域住民を交えての盛り上がりを見せています。

宮城県女川町に建設された清水仮設住宅と新田仮設住宅。
近隣に建つ両仮設住宅は、農園づくりなど、共同での活動を実施。
仲間の輪がどんどん広がっています。

自治活動は、どんなチカラを秘めていたのか。
住民たちにどれだけの笑顔をもたらしたのか。

あなたのまちの活動はどうですか？





毎朝のラジオ体操

みんなで元気に暮らすために

◎イオン南方店跡地応急仮設住宅・南方高齢者クラブ（宮城県登米市）

ポイント

1. 住民の自然な声かけと気かけ合う関係づくりこそ、閉じこもり・生活不活発病防止。支援者自身が見守るだけでなく、住民の見守りを支えよう。
2. 住民による声かけは、“ひとりじゃない”ことを確信できるカギとなります。

住民を孤立させない

東日本大震災後、各地に建設され、今なお多くの住民が入居する仮設住宅。震災のショックはもろろんのこと、慣れない土地での生活や顔見知りが少ないといった状況に、入居が開始された当初は、入居者の引きこもりや孤独感を懸念する声がさまざまな機関で取り上げられていた。そういった状況に、なんとかしてはいけなく感じていたのは、住民を支援する立場の者だけではない。同じ仮設住宅に暮らす住民を孤独にしたいわけではない。その思いを胸に、行動を起こした仮設住宅の住民はたくさんいる。その一つが、宮城県登米市にあるイオン南方店跡地応急仮設住宅の入居者が結成した、「南方高齢者クラブ」だ。

高齢者同士、支え合おう

宮城県南三陸町から避難した住民が暮らす同仮設住宅。同じ町の出身といっても、暮らしていた地区はさまざまなために、仮設住宅へ

の入居を機にはじめて出会う人が多かった。「以前の隣組もないですし、入居したばかりの頃は、部屋に閉じこもりがちになってしまいう人もいたんです。それが直接の原因かどうかはわかりませんが、体調を崩す人も多くいました」そう話すのは、南方高齢者クラブの会長、古澤孝夫さん。そういった傾向は、特に高齢の住民に多く見られた。「縁あって出会った仲間。誰一人として孤独にはさせたくないし、みんなで元気に暮らしたい。そのためには、まずは外に出ようと思う。きっかけが必要なんです。私も同じく高齢。同じ高齢者同士、気持ちがあわがる部分もある。住民みんなが一丸となって支え合えば、声がかければ、外に出るきっかけをつくれれば、閉じこもってしまう人は少なくなるのではないかと。各棟の世話役を務める住民に相談し、2012年7月、南方高齢者クラブを結成した。現在50歳代〜90歳代の住民91人がクラブの会員として登録。会費は無料。同仮

イオン南方店跡地応急仮設住宅・南方高齢者クラブ

会長 古澤 孝夫さんと 奥様の正子さん

「縁あって出会った仲間。誰ひとりとして孤独には

させたくないし、みんなで元気に暮らしたい」



設住宅の自治会や南三陸町
社会福祉協議会のサポート
を受け、運営している。

交流のきっかけ

外に出る機会をつくるべく、最初に始めたのは集会所でのお茶会だ。高齢者クラブの活動に興味を示し、多くの人が集まるも、徐々に参加者が同じ顔ぶれになってきた。外に出るきっかけを待っている人はまだまだたくさんいるはず。そこで活動に加えたのは、月に一度の「チョイ飲み会」。これが予想以上の好評を得た。

ちよつと飲むのはもちろ
んお酒。「チョイ」が「超」
にならないようにって名前
をチョイ飲み会にしたんだ
けど、実はいっぱいお酒を
飲む人っていなかっただよ
よ。でもすごく盛り上がっ
てね。おもしろいんだよ」
と、教えてくれた奥様の正
子さん。お茶会とはまた
違ったにぎやかな雰囲気
にひかれ、毎回50人前後の
人が集まっている。最近で
はチョイ飲み会の際に一つ
テーマを設け、数人の住民



大勢の住民が集まるチョイ飲み会

がそのテーマについて話す
機会を取り入れた。「いろ
んな人が話し、交流が深ま
るきっかけになれば。『次
は私に話をさせて』って人
も出てきたんだ」と、古澤
さんはほほえむ。

気にかけて合う関係づくり

そのほかにも、毎朝のラ
ジオ体操や仮設住宅敷地内
の広場を利用してのグラウ
ンドゴルフが活動に加わっ
た。住民同士の交流を楽し
みながら身体を動かすこと
で、生活不活発病の予防に
つながればという願いも込
められている。この2つに
は、高齢者クラブの会員で
はない住民も多く参加して

いる。グラウンドゴルフに
は敷地内に建てられている
グループホームの入居者も
参加。「みんなでやるから
楽しいのだし、いろんな人
が集まって知り合うから、
『〇〇さん昨日こうだった
よね、じゃあ、こういうと
き手伝おうか』って、自然
とお互い気にかけて合っ
てるんだよね」と、古澤さん。

また、クラブ活動や仮設
住宅内で催しがあるときに
は、ふだんなかなか外に出
てこない住民へ、高齢者ク
ラブの役員が積極的に声か
けを行っている。「この
仮設住宅は南三陸町協会の
支援員さんが訪問してくれ
ていて、本当に助かってい
る。だから私たちは特別「見

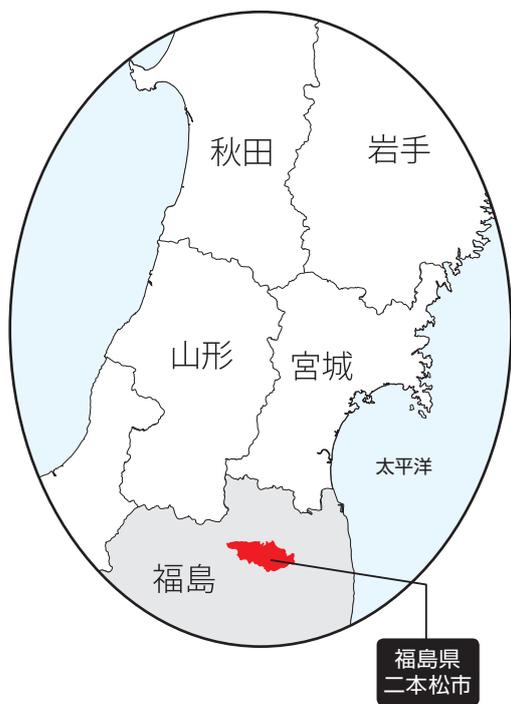


みんな集まると話題が尽きない

守り」っていうのではな
く、『今日こんなのあるよ！
来てみらいん！』って声を
かけているだけ。もともと
外出するのが好きじゃな
いって人もいるだろうか
ら、無理に引っぱり出そう
とはしないけど、同じ住民
から声がかかるっていうの
は、やっぱりうれしいもの
じゃないかなって思うんだ
よね」。そう古澤さんが話
すように、住民が「声をか
ける」というその一つの行
動で、「ひとりじゃない」
と実感できるのだ。

今の思い出に彩りを

「誰ひとりとして孤独に
しない」その思いで立ち上
げた南方高齢者クラブ。そ
の願いは実を結び、今では
多くの住民が交流を深めて
いる。いつかはまたみんな
離れてしまうのかもしれない。
けれども、それぞれが
過去を振り返ったときに、
「この仮設住宅でよかつ
たね、楽しかったね」と、
仮設住宅での思い出が良い
ものになってほしい。それ
が南方高齢者クラブの新た
な願いだ。



サークル活動の達人たち!

サークル活動は私たちの誇り! 自慢の仮設住宅

◎二本松市建設技術学院跡地仮設住宅(福島県二本松市)

ポイント

1. サークル活動の達人が地域にたくさんいる! 「やってみたい」「好き」という気持ちをどんどんカタチに!
2. 仮設住宅の活動から周辺地域全体が活性化することも! 仮設住宅が開いていくことの支援も大切です。

笑顔が絶えない仮設住宅

集会所に一歩足を踏み入れた途端、大きな笑い声が聞こえる。毎日、いつでもどんなときでも住民の笑顔が絶えない仮設住宅。それが、福島県二本松市にある二本松市建設技術学院跡地仮設住宅だ。2011年8月から入居が始まった同仮設住宅には、福島県浪江町出身の住民22世帯が暮らしている。敷地内を歩くと、皆どこかしらで立ち話。「今日はなにつくったの?」お昼になると、敷地内にある住民たち手づくりの「隠れ家」に、惣菜を持ちより食事会。「世帯が少ないこともあるけど、この仮設住宅で知らない人はいない。知らないどころかみんな仲良しだよ」そう話すのは、自治会長の鎌田優さん。鎌田さんだけではない。「あんまりみんながいい人すぎるからさ。浪江の人ってこんなにいい人だったっけ!? って思っちゃうよね」と、金澤秀子さん。武石初男さんも「特別なことをしているわけではないんだけど、なんとなしにみんな集

まるんだ」と、ほほえむ。住民全員が同じ気持ち。ちよつとお話を伺っただけでも、親交の深さが伝わってくる。なぜこんなにも仲が良いのか、その秘訣はサークル活動にあった。

サークル活動で深まる交流

「みんな浪江町出身だけど、住んでいた地区が違うからね。仮設住宅に入居したばかりの頃は、外でたまたま会ってポツポツ話すことはあっても、今みたいに、みんなで盛り上がり、なんでも話し合おうよ、って雰囲気ではなかった。私たち自身、まさかこんなに仲良くなるなんて思っていなかったよね」と、当時を振り返る鎌田キヌさん。住民同士の交流も、最初から活発なわけではなかったのだ。「あのときは、ないない尽くし」だったんだよね。物もない、知り合いもない、外に出る用事もない。これじゃいけないって思った」そう話す鎌田さん。なんとかしなければ…。そこで、数人が立ち上がり「今なにをしたいか」、みん

二本松市建設技術学院跡地仮設住宅

自治会長 鎌田 優さん

「助けてもらってばかりじゃ、いつまでも被災者のまま。自分たちのためにもそれではいけない。これからは私たちが感謝の気持ちを返していく番なんです」



なに聞くことから始めた。「『なにかやりたいことない?』って聞かれて、なんだろうねって話していたら、たまたま浪江にいた頃、絵手紙をつくっていた人が何人かいて。じゃあやってみようかって……」と、小林美代子さん。そうして開催された絵手紙づくり。これが、同仮設住宅にとつての大きな転機となった。

絵手紙づくりが集まった住民からは、「フラダンスもやってみたいよね」「知り合いにフラダンスの先生いるよ!」「手芸が得意なんだ」と、次々とやってみようとした。得意なことが湧き出た。やりたいたいことがいっぱいあるんだ、片っ端からやってみようよ!」

そうして、一つ新たなサークルが立ち上がるとまた一つ別のサークル、というように、さまざまサークルが立ち上がった。フラダンスサークルに参加している遠藤洋子さん、武石定子さんは、「フラダンスの先生も『来るたびにうまくなってるね』って言うてくれて。それもすごくうれいよね」「一週間が本当に



小物づくりサークルでつくったものは、これまで支援して下さったボランティアさんたちにお礼としてお渡ししています

あつという間!」と、声を弾ませる。サークル活動は『ないない尽くし』だった生活に、楽しみや生きがい、活気という彩りを添えた。

自治会で毎月つくっている仮設住宅内の予定表を見ると、休みの日としている火曜日以外は、サークルの予定がびっしり埋まっている。「サークル活動といつても、メインはお茶飲みながら話す時間だったりする。毎日みんなの顔を見るってことがたいせつなんだよね。顔を見ないとなんか落ち着かないっていうか、寂しいもんな」と、太田敬重さん。住民の間に深い絆が生まれた。

目を重ねることに結束を深めていった住民たち。その活動は仮設住宅内にとどまらず、周辺地域へも輪を広げている。住民たちは、近隣の保育園のイベントやほかの仮設住宅へ、炊き出しやフラダンスの披露を行っているのだ。もちろん、自分たちの仮設住宅でイベントが開催される時には、地域住民にも呼びかけている。「助けてもらってばかりじゃ、いつまでも被災者のまま。自分たちのためにもそれではいけないと思っっています。これから私たちが感謝の気持ちを返していく番なんです」と、

私たちの番



「仮設、楽しいよね」そんな声が多く聞かれるこの場所は、自慢の仮設住宅です

鎌田さん。サークルの一つである手芸活動でつくった作品も、すべてこれまでかわったボランティアに渡している。「皆さんにいっぱいお世話になったからね。気持ちを込めているんだ」と、田中トクさんは作品をぎゅっと握りしめる。

「仮設住宅での暮らしは窮屈だ、嫌だ嫌だつてよく言うじゃない。確かに最初は、こんな狭い部屋で知らない人ばかりでやだなあとは思ったよ。でも今は、俺たちほど仮設住宅の生活を楽しんでる人たちもいないんじゃないかって思うんだよね。皆本当におもしろいだろう」と、笑顔で話す遠藤清之さん。その表情は清々しく、誇らしげ。

「ここでもよかった。みんなと会えてよかった」住民たちが話す言葉の一つひとつから、今の暮らしへの愛情が感じられる。

二本松市建設技術学院跡地仮設住宅は、住民自慢の仮設住宅だ。

音



ふれあい農園での作業は、住民たちの楽しみ

畑仕事で交流育む住民たち

◎清水仮設住宅、新田仮設住宅（宮城県女川町）

ポイント

1. 他の仮設住宅や地域住民と一緒に活動できる「つなぎ」も大切。みんなが集まれば楽しさも倍増！
2. サークル活動が生きがいとちょっとした仕事づくりにも。活動は今を楽しむためだけでなく、これからの生活に活かされるものがたくさんある！

盛んな住民活動

宮城県女川町の清水仮設住宅と新田仮設住宅。山間に二つの仮設団地が寄り添うように建っている。それぞれ125世帯、95世帯が暮らす。どちらも早期に自治組織が結成され、住民交流も活発に行われた。

清水仮設住宅は、震災からほぼ3か月後の6月半ばから入居が始まり、9月には自治会が組織された。ほぼ同時に趣味や手芸、体操、ペタンクなどスポーツのサークル活動が立ち上げられた。翌年3月には、東北福祉大の協力を得て、近隣遊休地に住民向けの貸し出し農園「ふれあい農園」が整備されている。

農園では、清水・新田両仮設の住民約30世帯が、大根やサツマイモ、葉物野菜などを栽培している。

同大学が立ち上げにかかわったものにはこのほか、使われなくなった剣道の竹刀を原材料に、まごの手を製作するサークルがある。製品は1個300円で販売され、町内外で人気を博している。

活動継続の秘けつは

「いろいろなサークル活動がありますが、特に農園、ペタンク、カラオケ、まごの手製作は活発ですよ」

こう語るのは、清水仮設住宅の自治会長を務める高橋義弘さん。「サークル活動は、シユンとしている住民を元気づけてくれます。知らない人同士が話をし、顔と名前を知るきっかけにもなります」

ペタンクは、中高年向けのスポーツとして震災以前から町内の老人クラブなどで楽しむ人が多かった。これが仮設住宅での交流に活きた。

活動が盛り上がりならず自然消滅したサークルも。

「いくつかの手芸サークルは、はじめは盛んでも徐々に下火になりました。得手不得手や上達具合で差が出たりしたからかもしれない」

活動を円滑に継続していく秘けつはなんだろう。

「中心メンバーがいて、しっかりとまとめ役を果たすことでしょうか」

会員相互の理解や協力は



清水仮設住宅の自治会長、高橋義弘さん

当然必要だが、リーダーや会計など事務方が役割をきちんと果たすことも継続の大事な要件のようだ。

農園整備やまごの手製作のように、外部の支援団体と積極的に連携することも大いに助けになる。軌道に乗れば支援に頼らず自分たちで活動を支えていく姿勢も重要。農園整備では当初大学の支援を受けたが、その後住民が自主的に共同作業で区画を増設している。まごの手製作では、のちに同じ材料で靴べらをつくるアイデアがサークル会員から出され製品化に成功。これも人気商品となっている。

今後仮設住宅集約に不安も

自治会活動としては、初

期の段階でゴミ出しルールをつくり周知を図った。また、長屋形式の住宅の棟別に班長を配置。一般的に班長の任期は1年だが、仮設住宅の特性を考慮し3か月とした。短期の班長交代は住民同士が知り合う機会を増やす。今後は、災害公営住宅（復興公営住宅）などの整備進展で住人が減少していく。仮設住宅の集約などが行われれば顔ぶれも変わる。

「そのたびにサークルの再編や自治会ルールの周知、住民同士の関係づくりが必要。心配しています」

どんなまちにも住民の出入りはある。しかし、仮設ではその規模とスピードが桁違い。住民が主体性を保ちつつ、状況に応じて行政や支援団体を活用し乗り切る以外、有効な方策はなさそう。地道な努力とその経験は、仮設を出たあとの生活再建にもきつと活きるだろう。

木

専門家に聞く地域づくりのヒント

自治活動に求められるアイデア



北星学園大学社会福祉学部 教授

杉岡 直人（すぎおか・なおと）さん

地域福祉学、福祉社会学、農村社会学を専門とし、北海道地方社会保険医療協議会長、北海道介護予防・地域包括ケア市町村支援委員会委員長、地域包括支援センター等職員研修・カリキュラム検討委員会委員長など、さまざまな公職・委員を務める。

参加を促すコツに注目

自治活動は、地域住民の地域住民による地域住民のための活動です。自治活動は住民だけで取り組む要素が基本なので、うまくいくときは力を合わせて盛り上がりますが、そりがあわないと、期待される成果を出すことはできません。仮設住宅は新しくつき合いが始まる場となりました。誰かが呼びかけ、つながりをつくり出さなくてはなりません。そこには、自然に参加しやすいコツがありました。

楽しいお節介で輪が広がる

宮城県登米市の南方高齢者クラブの場合、はじめて声をかけ合うような出会いの場となっていた仮設住宅において、まず世話役の集まりが会費無料の高齢者クラブを結成し、自治会と社会福祉協議会のサポートを受けて、お茶会が始まり、「チョイ飲み会」を開くことで盛り上がりを見せています。そこからラジオ体操、グラウンドゴルフと活動が広がり、生活不活発病の防止を図っています。

好きな活動を好きな人で

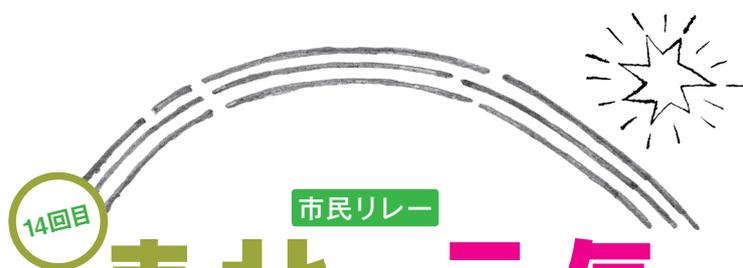
福島県二本松市の仮設住宅の場合、サークル活動があちこちに広がっていく新しいタイプの自治活動になって

います。そもそも自治活動は決まりきったメンバーの決まりきった活動しかないという印象がつかまっています。しかし、好きなことを好きな者同士が取り組むことで、束縛されない自主的な活動への参加が加速しています。

大学との連携で、身体を動かして、ものづくりを

宮城県女川町の仮設住宅では、大学との連携でふれあい農園を立ち上げ、大根やサツマイモ、葉物野菜をつくり、その後、バタンクなど、さまざまなサークルが設立されました。ものを育てる、製作するという仕事につながる活動には社会につながる基本がみられます。まごの手製作と販売など、ものをつくる取り組みにも注目です。

こうした自治活動の成果をみると、チョイ飲み会のように＜楽しみを期待できるメニュー＞を取り入れること、サークルのように＜選択肢があって好きなことを取り組める＞こと、農園や製作活動のように＜身体を動かし、ものづくり＞を用意することが決め手になることがわかります。住民のなかにはすぐれたセンスをもっている人たちがいます。これらに伴走しながら解決するのがコミュニティワーカーの仕事です。



14回目

市民リレー

東北の元気



宮城県
仙台市

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。



マートル

◎宮城県仙台市

Writer 矢田海里



作品は市内3か所で販売



みんなで相談しながら作業は進みます



とっても可愛らしい小物ばかり



宮城県仙台市内の借り上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）に暮らす人たちの集まりの一つ、「マートル」。手芸を中心に、2012年の年明けから活動を開始。マグネット、ヘアピン、シュシュ、針山、ぬいぐるみなどを中心に制作し、販売してきた。

活動の主体は、東日本大震災前に仙台市若林区の藤塚、井土浜地区に住んでいた女性たちだ。震災後、借り上げ住宅に移り住んだ人々には、支援や復興に関する情報がほとんど入ってこなかった。そのため、市の説明会などで偶然顔を合わせた人同士や、商店や道端で偶然再会した地元の間で声をかけ合い、マートルの結成に至った。

手芸の活動を大きく前進させたメンバーの太友広美さんは、震災前から手芸品をインターネットなどで販売していた。手仕事や、震災後に崩れてしまった人と人との輪を広げる役割を果たせるのではないかと、情報を交換し、不安を打ち明ける場所になるのではないかと考えた。



最初は太友さんが教えるかたちで制作していたが、ほどなくして参加者がアイディアを出し合うようになった。活動は、仙台市宮城野区岡田の復興支援センター、若林区の産直広場ぐるぐる、市民センターなどで、月に2回ほど。でき上がった作品はイベントなどに出版している。

始めた頃、やりにくさもあった。あるイベントに出店したとき、ほかのブースはボランティアが入り、「被災した人たちがつくったものです」と言いながら売っていた。しかし、自分たちだけで売らなければならぬマートルでは、自ら「被災」を看板に販売しなければならず、心理的な抵抗があった。「被災」の事実よりも、むしろ「マートル」の作家性を前面に押し出すことも多くなった。

「あくまで趣味。楽しみながらお茶を飲み、みんなが再び集まれる場所」と太友さんは話す。きびしい生活再建がつづくなか、ひと息つける貴重なオアシスだ。



震災で自分の地域を

見直した住民たちの力

宮城県美里町



内陸での被害

宮城県北東部に位置する美里町は、2006年小牛田町・南郷町の2町が合併して生まれた人口2千人余りのまちだ。基幹産業は農業で、交通アクセスのよさから仙台市・石巻市・大崎市の通勤圏ともなっている。

この地域は、2003年に宮城県北部連続地震で被災しており、再び東日本大震災によって3,886棟の家屋が全半壊するなどの被害を受ける一方、避難所となった南郷体育館と下二郷コミュニティセンターでは沿岸部からの町外避難者も受け入れた。2013年11月18日現在、町内2か所にある応急仮設住宅64戸に37世帯が暮らし、今年10月に入居が始まった町内3か所の災害公営住宅40戸には28世帯（うち町外から7世帯）が引っ越してきた。さ

らに小牛田駅東の新興住宅地には、被災世帯を含む子育て世代が多く移り住んでおり、内陸の美里町においてもコミュニティづくりが課題となっている。

仮設住宅でお茶のみ会

美里町の応急仮設住宅入居者は、元の自宅を改修・新築するまでという将来の見通しが立っている世帯が多い。町では、仮設住宅を対象に健康調査を年1回実施し、その結果をもとに、震災前からかわってきた支援の必要な世帯を含めて、町の保健師や地域包括支援センター、町社会福祉協議会が連携して戸別訪問や相談に応じてきた。美里町では応急仮設住宅への入居期限を2014年5月末までとしており、「現時点で将来設計を描けずにいる3世帯をフォローしてい

たい」と町健康福祉課保健師の菊地知代ちよこさんは話す。

一方、仮設住宅では月5回のお茶のみ会が開催されてきた。町社協では、当初より52戸の中塚仮設団地の集会所で、地元のボランティアやおおさきレクリエーション協会の協力を得て、ニュースポーツやおしゃべりを楽しむ「すまいるサロン」を週1回運営。また、地元の主婦で構成される「ボランティアグループ中塚」主催の月1回のお茶のみ会では、仙台大学の協力を得て仮設住宅だけでなく周辺地域の高齢者も交じり、軽体操やボランティアによる地場の手料理を囲んで懇親してきた。常連の参加者の姿が見えないときには、ボランティアが家を訪ねて食事を出前しながら安否を確認するなど、地域のなかでゆるやかな見守り活動が展開されている。



中塚仮設団地でのボランティアグループ主催のお茶のみ会

10月以降は自立再建して退去した空き室が増え、「すまいるサロン」の参加者も数人となったことから、12月以降はボランティアグループ中塚主催のお茶

のみ会を主軸に据えて、中塚地区以外に住む、気になる要援護者もお茶のみ会に誘いながら開催していく方針だ。また、仮設住宅の班長や地元の区長、民生・児

童委員、地域包括支援センター、行政、町社協、警察署、消防署などによる支援者情報交換会を2013年10月に開き、「人数の減った仮設住宅入居者の寂しい思いを少しでも軽減できるように、今後も新年会などの季節行事を開いて顔を合わせる機会をつくろう」と話し合った。入居期限の2014年5月末まで、関係機関と地域が連携して仮設住宅の暮らしを支える。

災害公営住宅での

暮らしを支える

美里町では3か所の災害公営住宅で入居が始まり、新たな暮らしを支える動きが活発だ。支援が必要と思われる入居者宅には、町や県が仮設住宅を対象に実施した健康調査結果をもとに、地元の民生・児童委員と地域包括支援センター、町社協と一緒に訪問し、顔合わせを行っている。入居者にとっては、地元の住民



2階建てアパート形式の災害公営住宅・御蔵場住宅（24戸）

（民生・児童委員）と専門機関に一度に会い、同じ話を何度もする手間が省けるだけでなく、彼らが連携していることも伝わって安心感が増す。災害公営住宅が立地する御蔵場の自治会では、通常の地域のお茶のみに災害公営住宅の入居者を誘い、歓迎の意を伝える交流会を開いた。入居者が地域のひとと顔を合わせる場となり、住民側も

どんな人が引っ越してきたのかを理解して、お互いが歩み寄る機会となった。

また、美里町では災害公営住宅への引越し費用は自己負担となっているが、被災者の生活支援の一環から、町社協では仮設住宅から町内の災害公営住宅に引っ越し世帯を対象に、地域のボランティアと荷造りや家具・家電の搬入を手伝っている。引っ越しをとおして入居者と地元住民が自然に顔合わせを行い、地域に仲間入りをして早く馴染めるようにというねらいがある。また、「入居者の生活支援の必要性の有無や部屋の間取りを把握して、今後の支援につなげることができれば」と、主任福祉活動専門員の永沼威雄さんは話す。これまで、20〜70歳の地域ボランティア延べ19人が、8軒の引っ越しを担った。町外の借り上げ賃貸住宅（みなし仮設）から町内の災害公営住宅への引っ越し依頼も受けており、美里町社協の取り組みに近隣の市町村社協も関心を寄せている。

地域を見直す住民たち

11月には、被災世帯を含む子育て世代が多く移り住む小牛田駅東の新興住宅地で、今は挨拶程度の住民同士の引き合わせて顔合わせの場をつくろうと、立地する町社協が区長たちとともに「ゆとり」とカフェを催した。当日は予想を超え

る約300人が来場し、無料で振る舞ったボランティアによる手づくりの郷土料理「すっぽこ汁」も足りないほど盛況となった。事前にイベントのPRを兼ねて戸別訪問しながら尋ねたアンケート調査では、「地元公園を設置してほしい」などの要望が30〜40歳代から寄せられ、まちづくりへの関心の高さが伺えた。引き続き、町社協はこの新興住宅地で地域支援を行う予定だ。町社協では2013年6月、町民を対象とするコミュニティづくりに関するアンケート調査を行い、その結果を、地区社協エリアごとに地域懇談会を開いて住民と確認し合った。吸い上げた地域課題は、現在策

定中の第2次地域福祉活動計画に盛り込み、具体的なアクションにつなげる。震災後は、区長や民生・児童委員が自分の地域を見直し、単なるおしゃべりの場だと思っていた「お茶のみ会」の目的をあらためて考えるようになるなど、前向きな地域づくりが町内各地で始まっている、と町社協

地域福祉係長の浅野恵さんは分析する。ある地域では会員互助型ボランティアグループが結成され、住民同士で外出や買い物を支援する活動を始めた。その噂を聞きつけた別の地域が関心を持ち、そのボランティアグループに地元で講話をしてもらい、自分のところでも取り組めないかと動き出したという。一人でも多くの人が顔見知りになり、必要なときに支え合える豊かな地域にしようとして、コミュニティリダーたちが意識的に動き出している美里町。町を形成する主役は、行政でも専門機関でもなく、一人ひとりの住民であることを再認識した取材だった。

災害公営住宅について考えよう!

宮城県内の被災市町では、被災者の生活を支援するために、各種支援員を設置して、戸別訪問や相談事業、サロンづくりなどを行っています。支援員の多くは、震災で家や職を失った被災者であり、介護や福祉の知識・経験のない人もいることから、宮城県が設置した「宮城県サポートセンター支援事務所」が関係機関と共同して、これら支援員対象の研修会を開催しています。期待される役割や個別支援と地域福祉活動の理解を深めることに重点を置いた研修では、基礎知識を学びつつ、グループワークを多用して、毎回さまざまな事例について白熱した話し合いが行われています。

2014年の2月から、新たに「災害公営住宅移行研修」を開催いたします。今回は、新しい研修内容をほんの少しご紹介いたします。

災害公営住宅 移行研修ってなに？

建設が進む災害公営住宅（復興公営住宅）。災害公営住宅への転居が始まる時期は、仮設住宅や借り上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）に暮らす住民の不安が高まりやすい時期といえます。また、災害公営住宅への入居が決まればそれで一安心！ではありません。新たな暮らしの始まりとともに、ここでもまた、さまざまな課題が浮かびあがることが予測できます。

そういった課題に対峙した住民たちの負担を軽減できるよう、仮設住宅や借り上げ賃貸住宅から災害公営住宅等への転居が始まる時期の支援を学ぶことを目的とし、「災害公営住宅移行研修」を開催いたします。

研修カリキュラムと目次

※研修内容等は、一部変更となる場合があります。ご了承ください。

1日目

あいさつ 研修のねらい、各種制度の理解

単元1 生活と支援活動の移り変わり

1
限
目

- ねらい1 | これまで活動を振り返り、その経験を災害公営住宅支援に生かしましょう
- ねらい2 | 災害公営住宅への移転期の暮らしと支援の変化を学びましょう

単元2 災害公営住宅への転居と支援の方法

2
限
目

- ねらい1 | 仮設住宅から転居が始まる時期の支援を学びましょう
- ねらい2 | 仮設住宅を閉鎖する時期の住民支援を学びましょう

単元3 地域での受け入れ姿勢をつくる支援の方法

3
限
目

- ねらい1 | 災害公営住宅など、仮設住宅から住民を受け入れる地域の役割を学びましょう
- ねらい2 | 仮設住宅からの住民を受け入れる地域への働きかけを学びましょう

単元4 地域資源を発見する・つなぐ・つくる支援の方法

4
限
目

- ねらい1 | 地域資源を発見・つなぐ・つくる支援の意義を学びましょう
- ねらい2 | 地域資源を発見する方法を学びましょう

2日目

単元5 住民の見守り・支え合いをすすめる支援と実際

1
限
目

- ねらい1 | 住民による見守り・支え合いの意義と方法を学びましょう
- ねらい2 | 住民による見守り・支え合いと専門職との連携を学びましょう

2
限
目

事例検討・まとめ

次ページで、研修（演習）の一部をご紹介します！

演習

たいせつにしたい暮らし・まちの姿と 支援のカタチを考えよう

これから、仮設住宅や借り上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）から自力再建したり災害公営住宅に転居したりと、生活のあり方が大きく変わる時期に入ります。あらためて、災害公営住宅入居者の望む暮らしとまちの姿、サポーターがたいせつにしていること（活動理念・信条、基本的な支援スタイル）を話し合ひましょう。

たいせつにしたい暮らし・まちの姿（目指す方向）

サポーターがたいせつにしていること（活動理念・信条、基本的な支援スタンス）

1 住民一人ひとりが孤立せず、 かかわりのなかで生きる支援を

住民一人ひとりが、認め合う人間関係のなかで自分らしく生きるために、役割づくりや仲間づくりの支援をしましょう。そのためにも、地域で暮らす同じ仲間として、支援を要する住民とつながり、信頼関係を育むことがサポーター活動の第一歩です。サポーターの想いでなく、相手の想いや考えに寄り添った支援をすすめましょう。

2 ともに助け合う 地域づくりの支援を

地域内での住民の自主的な見守り・支え合い活動を意識的に支援しましょう。特に、住民同士が出会って、良好なコミュニケーションを育むきっかけとなるお茶会・ふれあいサロンづくり、学習会など、気づいたことを話し合う場づくりの支援をすすめましょう。

3 組織内・外との 連携・協働による支援を

サポーターも孤立しないように気をつけましょう。災害公営住宅入居者の生活全体を支えるためには、抱え込まず、家族や友人などの身近な人、近隣住民、関係機関と連携・協働し、ともに支えることが不可欠です。

まとめ

復興の最終目標は、被災者一人ひとり、すべての人の暮らし（生活）の質やまちの機能・活力が被災以前より高まることです。最終目標を達成するためには、福祉だけでなく生活全般にわたってどのような暮らしを望むのか、暮らしの場である地域はどのような姿であることが望ましいのかを描くことがたいせつになります。

サポーターの役割は、訪問活動等を通じて、住民の望む暮らしや生活課題を把握し、望む暮らしに向けて必要なサービスが利用できるように相談活動や調整を行ったりすることです（個別支援）。さらに、住民が望む地域の姿に向け、住民リーダーと一緒に、住民の生きがいや豊かな人間関係を地域のなかで生み出したり、住民が自分たちのまちをより良くしたりする活動の支援を行います（地域支援）。

忘れてはいけないことは、これからのより良い暮らしとまちづくりは、これまで積み上げてきた支援員や地域住民の活動の蓄積から創造されるということです。支援員や地域住民の活動でたいせつに積み重ねてきたこと、創り上げてきたことを、今一度振り返って、これからの活動につなげましょう。



生活困窮者への支援を考える

第2回 自立支援のカギは地域にあった！

櫛部 武俊 KUSHIBE TAKETOSHI

一般社団法人釧路社会的企業創造協議会副代表・宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザー

釧路モデル前夜

1988年4月、私は障がい児施設から保護課に異動しました。当時の釧路市は、22万人余の人口で、水産・石炭・紙パルプなどの基幹産業に勢いのある「生産都市」と言われていました。保護課は「生活保護適正化」が課題になっていた時期で、「保護を減らせ」という雰囲気でした。パワハラが日常化していたり、ケースワーカーが過労死するようなこともあり、息苦しい生活が続きました。

1997年頃から生活保護受給数は右肩上がりになりました。水産業は水揚げの激減、2002年には炭鉱が閉山するなど、地域経済の衰退がその背景であることは明らかでした。閉山を挟んだ3年間で、釧路市の生活保護受給者は30%（注 パーミル・人口1000人に何人受給しているかを表す）から40%に跳ね上がり、生活保護問題は向こう三軒両隣の問題になりました。「あの人が

保護を受けてよいのか！」などという声が毎日福祉事務所に寄せられました。

一方で、長時間の残業や担当件数が100件超えというケースワーカーの実態は変わらないままでした。職場の問題、生活保護行政のあり方を、他力本願ではなく自分たち自身で考える業務検討委員会という内発的な動きが職場に生まれました。「素養のないケースワーカー」たちでしたが、二度とあの暗い職場にだけはしないという気持ちだけは強くありました。釧路モデルができあがる前夜の出発点です。

自立支援の構図

当事者目線と地域

2003年、生活保護の世界で今までなかった新しい「自立と支援」が国の審議会で議論されるなか、国から自立支援モデル事業の話があり、2004年〜2005年までの2年間母子世帯自立支援モデル事業に取り組みました。その

際、大学教員、NPO職員、教育委員など、地域のメンバーが入った作業グループを立ち上げました。福祉事務所だけでは、どうして支援策を考えることはできないかと思っただけです。案の定、会議では福祉事務所側提出の支援策に異論が生まれ、視点が欠落。エンパワメントの視点がないなどなど。あらためて「ネタ」さがしをし、ヘルパーに同行して話し相手をする「高齢者ご機嫌伺い」を試みました。「伺った先のおじいちゃんにほめられた」「ヘルパーさんに筋がよいとほめられ



『希望をもって生きる』
定価：本体1,600円＋税



【プロフィール】

1951年、北海道富良野市生まれ。北星学園大学文学部社会福祉学科卒。釧路市知的障がい児施設児童指導員、保護課勤務ケースワーカー等を経て、現職。2010年度厚生労働省社会・援護局「生活保護受給者の社会的居場所づくりと新しい公共に関する研究会」委員。著書に『希望をもって生きる～生活保護の常識を覆す釧路チャレンジ』（共著/CLC）など多数

た」と参加した生活保護受給の母子家庭の母親たちからこの試みが支持されました。地域のなかに生活保護受給者の自尊心を回復する資源があり、地域の資源とともに取り組むことが「自立支援」のカギだと気づかされました。こうして受給者の労働と生活との間に、「中間的就労」と呼ぶボランティア活動を組み込み、地域のNPOや社会福祉法人、株式会社による受け入れを広げる「釧路モデル」が2006年から本格化したのです。

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

サポートセンター行脚 ～高齢者虐待を考える②～
宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

虐待防止法という虐待対応には、予防的な視点が盛り込まれていながら、誰が見ても虐待という状況ではじめて動く例も多く、法の精神が反映された対応は少ないのが現状です。

認知症の母親の言動を受容できない娘Aさんは、それでも一生懸命に母親にかかわってきましたが、逆に母親の妄想により「娘がものを盗った」とののしられ、親子関係が壊れてしまいました。「積もるストレスで、つい怒鳴ってしまう自分が情けなくなる」とAさんから相談を受けたとき、私は「距離をおこう」「親子だからという想いとらわれないようにしましょう」と提案しました。

通帳やお金を自己管理できない母親に代わり、仕方なく取り上げるようにしてAさんは財産管理を代行していました。公共料金の支払いや介護保険の利用料の支払いなど、県外から毎週母親の家に来るとは、家の中の整理をしつつ、トラブルを生じつつ頑張っている様子に心が痛みました。

今すぐ虐待ということはないにしても、Aさんのこの袋小路は大きな懸念です。聞けば堅実な両親で、家族のための蓄えもあるので、財産管理を担う存在とあわせて日々の支援をコーディネートすることができれば、当面母親は地域での生活が可能でした。そこで専門職に成年後見人を依頼し、介護保険のサービス利用を見直し、認知症の精神症状の軽減に向けて、専門の医療にもつなげました。この相談では、地域で支えていた民生・児童委員とケアマネジャー、そして地域包括支援センターがともに支援にあたり、大きな力となりました。

ことが起きてからの対応ではなく、事前に懸念材料を払拭していく予防的な対応が求められます。その視点を、市町村、地域包括支援センターにこそ意識してもらっていただきたいものです。地域でこのような支援者をたいせつにしていける仕組みが必須です。日常を見守るサポートセンター機能は、むしろ平時から必要であることに気づかされた震災でした。

情報提供 平成25年度 岩手県高齢者等サポート拠点従事職員等研修

管理者(スーパーバイザー)研修 2014年2月7日(金) 大槌町役場 3階大会議室

問い合わせ先
全国コミュニティライフサポートセンター
TEL 022-727-8730

ひとりごと 

サポーターのあなたへ!



宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章

仮設住宅から災害復興公営住宅等への移転に伴う支援④
～移転に不安を抱えた方への支援……丁寧に正しい情報の伝達を～

仮設住宅から災害公営住宅への移転を決断できない人の不安の一つの背景には、情報伝達の問題があります。災害公営住宅の申請にともなう情報、移転先の住宅や家賃、病院や店、交通事情など地理的生活情報、移転後の支援関係情報とあわせて、それぞれ個別の事情に関連した情報の不足による不安があると思われれます。

行政から送られてくる災害公営住宅入居申請等の書類が読めない、理解できない、手におえないなどで、書類が届いていても相談できる人もなく、そこで滞っている場合もあります。また、誤ったうわさ話に不安を募らせることも考えられます。これからの住まいに関するたいせつな情報が、正しく理解できていない、適切に処理できないとなると、不安はますます募り、投げやりになったりすることにもなりかねません。

阪神・淡路大震災のときにも、そうした人たちへの支援が適切になされなかったことからくる問題が生まれました。その一方で、支援団体のスタッフが本人に面談して行政などからの情報を対話方式で丁寧に説明し、申請や移転先の住宅や地域の生活情報などを伝え、喜ばれたという事例もあったと聞きます。

支援員が行政の説明会に参加したり、災害公営住宅を見ておくことも有効です。

いずれにしても、サポートセンターなどが行政などの調整のうえで、援護の必要な世帯について個別対応による正しい情報の提供と、課題に応じた寄り添った支援を行うことが必要です。

【プロフィール】鳥取県生まれ。兵庫県川西市、兵庫県と大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動の推進や個別支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンターの支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。

集会所でよく耳にするのは

お母ちゃんたちの

元気な笑い声

女性のにぎやかさは

心がぱつと明るくなつて

いいけれども……

たまには、男だけで

じつと静かにくつろげる

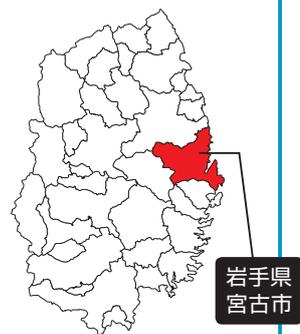
そんな場所が

あつてもいいよね

男だけでもいいもんだ



将棋の相手は、自然と集まる仲間たち



岩手県
宮古市

2013年7月28日、岩手

県宮古市に建つ、グリーンピア三陸みやこ仮設住宅団地の敷地内に、「男の談話室」と名付けられたサロンがオープンした。仮設住宅住民からの、

「男が静かにくつろげる場所がほしい」といった声をもとに、長期化する仮設住宅での暮らしへの対応策の一つとして開設された。当初は毎月第1・3日曜日に開催していたものが、今では週6日（火曜日～日曜日、10時～16時）の常設サロンに。散歩のついでに立ち寄り休憩をしたり、将棋や会話を楽しむなど、気軽に男性が集まる「場」をつくり出している。

この男性の居場所を運営しているのが、傾聴ボランティア「支え愛」の男性メンバーだ。傾聴ボランティアは、震災前の2006年から同市宮



気軽に立ち寄れる男性の居場所としてオープン

古地区周辺で活動している団体である。代表の三浦章さんは、「男性にとつて、居心地のよい場所になつていくように感じます。一緒にお話しするなかで、一人ひとりと向き合うことを意識しています」と、穏やかな口調で見守っている。

地元の団体ということもあり、宮古市社会福祉協議会や仮設住宅支援員と連携しながら、長期的に活動を行うことができ、訪れる住民たちに安心感も与えているようだ。

三浦さんは、「これから『男の居場所』がどのような変化をしていくのか楽しみです。」と、ともに支え合う仕組みができることを期待している。

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?
お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

●購読会員 年3,600円(年12回、送料込み)

●支援会員 1口3,600円(年12回、送料込み)

ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援課または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号: 02260-9-46303
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、
①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。

☆次号予告 特集「集団移転から見えるまちづくりのカタチ」

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

15号を読んで…

- ・住民の皆さんの思いがひしひしと伝わってきました。これからもたくさん活動を紹介してください。(岩沼市・Cさん)
- ・現在、仮設住宅で暮らしています。いつ災害公営住宅に暮らせるのか、いまだ未定ですが、それまでの間みんなで楽しんで生活できるよう、情報紙に載っている活動を参考に、みんなで頑張ります!(登米市・Fさん)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

特集で紹介した、高齢者クラブ会長の古澤さん。なんと私の父の元上司だったのです。「大きくなったね」と微笑まれ、うれしさを照れくささでいっぱい。情報紙の取材を始めてから、私自身、本当にたくさんのつながりが生まれました。一つひとつの縁をたいせつに、これからも多くの活動を伝えていきます。(菅原)

バックナンバーがホームページで読めます!
http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/